



# 高級食材の生産・流通の現場を歩き グローバルゼーションの現実を見る

評者 北村行伸 一橋大学経済研究所教授

バレンタインデーのチョコレートの山、いい香りを立てているカフェ、高級フランス料理に用いられるコシヨウや岩塩、とびきり生きのいい伊勢エビ、口に入れるととろけそうなマグロのトロ。われわれはグローバルゼーションの恩恵を受けて世界中から高級食材を輸入している。ではこれらの一次

産品はどのようにして生産され、どのように届けられているのだろうか。われわれの払った代金は誰の収入になっているのだろうか。

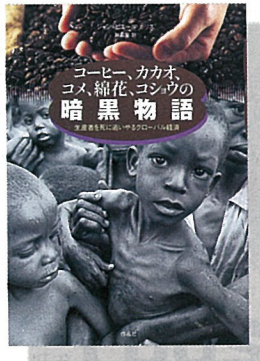
## 著

者はジャーナリストとしてフランスをはじめ、アジア、アフリカ諸国の報道に携わってきた人で、本書は著者がフランスの国营放送ラジオ・フランス・インターナショナルで「一次産品の市場動向」という番組を七年間続け、世界中の関係者取材してきた成果をまとめたものである。

## 生産者と買い手の本質的な格差

本書のテーマはグローバルゼーションの陰の部分である。世界銀

行やIMFが推進した市場自由化規制緩和の流れのなかで、生産者が協定が弱体化され、国際商品価格が崩壊し、生産者である農民だけが極度の貧困に陥った経緯が詳しく描かれている。



作品社 1600円

これはグローバルゼーションの問題なのだろうか。アマルティア・センは『人間の安全保障』(集英社新書)のなかで、グローバル化自体が問題なのではなく、グローバル化がもたらす利益の配分の仕方の問題があるのだと論じている。確かに、先進国の貿易商社や製造業者は農産物の価格変動や天候リスクに対して、金融派生商品を購入するなどして、危険回避を行なっているが、農民には、さまざま

なリスクを回避するための手だてもなければ、金融派生商品を購入するカネもない。これではリスクが一方的に農民に転嫁され、貧困が増幅されていくのは避けようがない。この仕組みを変えることなく、直接買い付けによって生産者に最低保証価格が国際市場相場値

格にかかわらずなく支払われる制度である流行のフェアトレードを導入しても焼け石に水だということ、著者はフェアトレードの有効性に対しては懐疑的である。本書はグローバルゼーションの多面性を見つめ直すいい機会を提示してくれる。